

共感覚の日英比較研究

岡 本 恵 美 子

〔要旨〕 英語における共感覚表現については、Williams 等により、その比喩的転移に五感の間で一定の方向性があることが報告されている。更に、この法則性は、他言語にも適用可能な普遍性を持ちうるという「検証可能な仮説」としても提示されている。本稿では、この仮説の日本語における検証を広範なデータ収集と英語版との比較分析により試みた。結果は、大方のところ日本語においても英語と同様の方向性が認められたが、同時に、「視覚的文化」といわれる日本文化の特殊性も浮き彫りとなった。生物としての人間の持つ普遍性と個々の文化の持つ特殊性とが織り成す共感覚表現の一端を垣間見ることができたといえよう。

0. 序

我々人間は、いかにして外部世界を認識しているか。まず、認識の第一歩として我々は、生物としての人間に本来的に備わっている身体的感覚—主に、五感—を通して、日々、外界からの情報を得ている。目、耳、鼻、舌、皮膚といった五官を、十全に活用し、五感を働かせることによって、様々な現象を体験し、判断の基準とするのである。この点においては、他の動物と大差はない。他の動物も同じように各々に本来的に備わった感覚器官を通し、外界の情報を処理しているのである。では、人間を人間たらしめているものは、何であろうか。それは、言語である。人は、五感によって得られた感覚を、言葉により表現するという特性を持っている。感覚は、人間が生まれながらに有している感覚器官を通して得られているため、人類に普遍的と言えるが、それを言語化した感覚表現は多種多様である。なぜなら、言語は、文化により、時代により異なるという特殊性と流動性を有しているからである。現在、地球上に約 5000 の言語が存在すると言われるが、同じように感じられた身体的感覚も、その表現方法となると、言語の数だけ、つまり、5000 通り存在することになる。

さて、この 5000 通りの表現方法の間には、どのような関係が見出されるであろうか。感覚が普遍性を持ち、それを言語化した表現が特殊性を持っているならば、当然、感覚表現は普遍性と特殊性とを内包しているはずである。問題は、普遍性という縦糸と特殊性という横糸とが、どのような綾を織り成しているのかということになる。

本稿では、感覚表現の中でも、「共感覚」と呼ばれる比喩的な表現方法を取り上げ、日英語を比較することにより、普遍性と特殊性との織り成す綾の一端の解明の一助となることを期待したい。

1. 共感覚表現についての先行研究と今後の課題

共感覚表現は、身体的感覚に基づくものであるため、生理学、心理学、物理学など様々な分野から研究されているが、ここでは、言語学の観点から画期的と思われる二つの英語における研究を概説し、その後、日本語における諸説を紹介したい。

1.1 Ullmann による共感覚表現の汎時的傾向の示唆

Ullmann は、1951 年出版の “The Principles of Semantics” の中で、共感覚表現の汎時的傾向を指摘している。彼は、19 世紀ロマン派詩人 11 名（英国人 8 名、米国人 1 名、仏人 2 名）の作品から収集した共感覚表現に統計的分析を行った結果、すべての作家に通ずる一般的な傾向を 3 点見出した。

1) 体系的分布 (hierarchical distribution)

(ある一つの感覚分野から、別の感覚分野への) 転移は、感覚中枢脳の下域から上域へ、あまり分化していない感覚から一層分化しているものへ昇ってゆく傾向があつて、その逆ではない。転移の総計 2009 例のうち、上昇転移は 1665 例、下降転移は 344 例を示した。下降転移は総数の 17% に止まっている。一人一人の作家を個別にとっても、同様な規則性が確認される。

<表 1>

著者	上昇	下降	計	下降比率
Byron	175	33	208	0.16
Keats	126	47	173	0.27
Morris	279	23	302	0.07
Wilde	337	77	414	0.19
‘Decadents’	335	75	410	0.18
Longfellow	78	26	104	0.25
Leconte de Lisle	143	22	165	0.13
Gautier	192	41	233	0.18
計	1665	344	2009	0.17

注) Ullmann は、4 人の「デカダン」詩人を一括して表している。

<表 1> は、Ullmann 作成の表に下降比率の欄を加えたものである。

2) 優位の出自（共感覚語を最も多く供給する感覚分野）

転移の主要供給者は、感覚中枢脳の最下水準である触覚である。Ullmann は、この調査に当たって、熱領域を触覚から分離し、独立した感覚領域として扱ったが、この熱領域を触覚に融合させてしまっても一向に問題ないとして、両者を合併すれば、この規則は一層強固なものとなると述べている¹⁾。

3) 優位の目的点（共感覚語を最も多く受容する感覚分野）

転移の主要受容者は、聴覚である。Ullmann は、感覚を分化度（抽象度）の低い順から、触、熱、味、嗅、聴、視覚とし、視覚を最上位に設定しているため、この結果は意外であった。つまり、1) で確認された転移の方向性に反する結果とも言えるのだが、この現象に対する理由を視覚用語の語彙の豊富さと対照的な聴覚用語の語彙の貧弱さに置いている。視覚用語は豊富にあるが故に、語彙の非常に少ない聴覚現象の叙述にも多くの語を提供できるが、逆に、聴覚現象の叙述には、聴覚用語の貧弱さ故に外部的な支えが必須であると結論している²⁾。

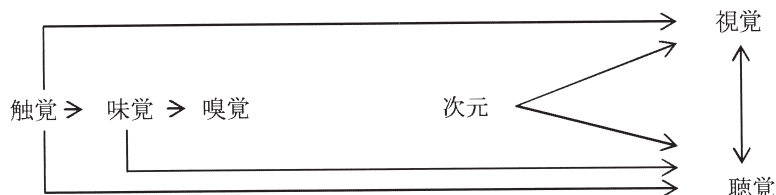
以上、3点を挙げた上で、Ullmann は、このような共感覚現象の汎時論的含蓄を確実に定めるためには、様々の国語や文学の多くの専門家による協力が必要であると述べている。

更に、共感覚現象は、時代によって異なる特性を持つものであるから、通時の変化をも考慮に入れた後にこそ、時空間を超えて残る原則—普遍性—を探求し始めることができると結んでいる³⁾。

1.2 Williams による共感覚形容詞の意味の通時的变化についての研究

J. M. Williams は、1976年に英語の共感覚形容詞についての研究を“Synaesthetic Adjectives: Possible Law of Semantic Change” (Language 52, pp.461-78) と題し、発表した。彼は、OED, MED, Webster 3rd を駆使して英語の共感覚形容詞 65 語の履歴を調べそれらの意味の通時的变化における規則性を見出そうとする試みの過程で、Ullmann の指摘した共感覚的比喻における転移の方向性を確認することとなった。この方向性は、分化度の低い感覚から分化度の高い感覚分野への転移であることから、Williams は、各感覚間に存在する階層性についても言及している。触、味、嗅覚といった皮膚感覚の上に視聴といった遠隔感覚を置いているが、視覚と聴覚とは相方向に転移が見られることから、同じ高位の階層と見なしている。また、彼は空間認識に関わる感覚分野として、「次元」(dimension) を設けている。65 語間の転移の方向は、下図のようにまとめられた。

<図1>



更に、彼は英語以外の印欧語数語においても同様な方向性が見出されることを確認した後、文化的に全く異質の日本語においても同様の規則性を検証すべく、リサーチを行っている。広辞苑と informants からの情報を頼りに、計 32 語の共感覚形容詞の意味変化を辿り、英語で得られた方向性と同じ上昇転移という規則性を 91 % という高確率で確認している。しかし、この日本語版の資料には収集方法などに問題点が散見される。問題点は、以下に挙げられる。

- 1) source の問題： 広辞苑には OED に匹敵する、出典例の明確な年代の記載がない。更に、Williams の資料は、informants への依存度が高いため、判断の精度に疑問が投げかけられる。
- 2) 同訓異字の問題： Williams の資料には、日本語に特徴的な同訓異字語への配慮がなされていない。例えば、「粗い」と「荒い」という別個の言葉が、単に arai と表記され、単線的な処理（触覚—味覚—聴覚）がされているが、実は、この二語は共に共感覚形容詞ではあるが、各々別の感覚に属し、別の意味の転移を遂げている。atsui も然りで、日本語では、「暑い」「熱い」「厚い」の 3 通りあり、それぞれが異なる展開を見せている。

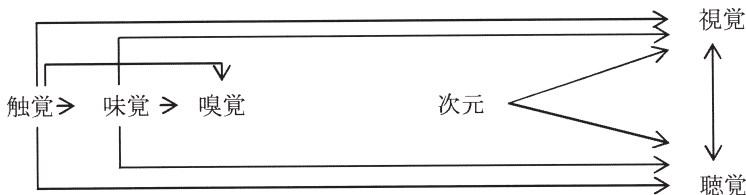
Ullmann によって示唆された共感覚的比喩における一定の方向性は、Williams の共感覚形容詞の研究によって、英語に関しては確認されたと言えるが、日本語においては、心もとない。Williams 自身も、論文の結びの部分でこの共感覚的比喩の法則性は「検証可能な仮説」としても提示されていて、より多くの言語における母語話者による研究の検証によって完成されるものであると述べているように、英語において示された一定の方向性が、普遍性を持ちうるものであるか否かの判断を下すには、日本語を始めとする他言語による更なる検証が必要である。

1.3 日本語における共感覚表現についての諸説と今後の課題

英語において認められた五感間の修飾関係の方向性は、日本語においても、大方、認められることが定説となっている。國廣は、「鋭い匂い」という言い回しが日本語にあることから、Williams の提供した体系図に「触覚—嗅覚」の線が日本的な共感覚表現の特徴として加えられると指摘し⁴⁾、後に、「味覚—視覚」の線も補足している⁵⁾。

國廣の提供する日本的共感覚的比喩の体系は、図 2 に示される。

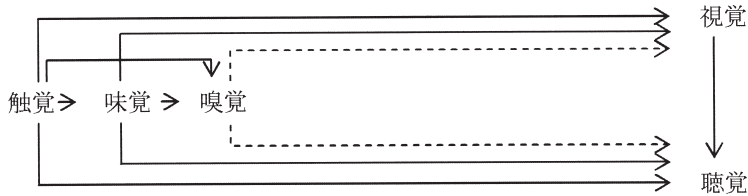
<図 2 >



この図では、Williams に倣って「次元」という要素を独立させているが、これは、視覚の外射の働きの結果といえるので、本来的に視覚に含まれるとし、結局、共感覚的比喩は、「接触感覚—遠隔感覚」という図式に単純化できると、國廣は結論している⁶⁾。

これに対し、山梨は日本的共感覚表現の方向性を次のように図示している。

<図3>



Williams の体系図に「触——嗅」と「味——視」の二つの線を加えた点では、國廣と同じであるが、山梨は、「聴——視」の線は、日本語では不可能と判断している⁷⁾。また、「かぐわしい色調/色彩」や「かぐわしい音調/音色」といった表現の可能性も否定できないために、「嗅——視」及び、「嗅——聴」の二つの線も、「判断のゆれ」として点線という形で取り入れている⁸⁾。山梨のこのような体系化に対しては、判断の基準とした言語例が少数であるという嫌いがある。村田も指摘するように、日本語における共感覚表現の分析においては、まずは、より広範なデータ収集を前提とすべきであると言えよう。

最後に、五感間に存在すると思われる階層性については、論者により意見が分かれるところであるので、ここで、紹介しておく。まず、触覚、味覚、嗅覚といった皮膚感覚に対する、視覚、聴覚といった遠隔感覚の優位性を認める点では異論の余地は無いが、問題は、視覚と聴覚の関係である。池上（1978: 141）は、視覚を最高位に置くが、安井（1978: 134）は、聴覚を最高位としている。山梨は、「聴覚——視覚」の線を不可能と判断することにより、結果として、聴覚の優位を認めることになっていると言えるだろう。國廣（1982: 124）は、Williams（1976: 463）と同様に、両者を同じ高位の階層であると見なしている。村田は、Ullmann の膨大な資料を再分析することにより、視覚を最高位と見なした Ullmann の判断に疑問を投げかけ、当時流行した心理学における視覚優位説に影響されたための判断ミスではないかと述べている⁹⁾。実は、Ullmann が、20 世紀前半の心理学的思潮に少なからず影響を受けたように、五感の階層性についての意見は、時代によっても異なるという特徴を持っている。

歴史的に概観してみると、古代ギリシアの哲人、Aristotle は、最も原初的な感覚として、触覚を挙げ、触覚の特定化された分野として味覚を、味覚に密接な分野として嗅覚を挙げている。更に、その上に、聴覚と視覚をあげ、視覚を最も高位の感覚としている¹⁰⁾。Democritus, Aquinas など古代の思想家は、こぞって、視覚に軍配を上げている¹¹⁾。特に、Aquinas が、触覚をすべての感覚の基本とし、嗅覚を最も進化の遅れた感覚分野と述べているのは、後世の嗅覚観への影響を考慮すると、注目に値する。古代には最高位とされた視覚は、中世のヨーロッパでは、聴覚にその地位を奪われることとなる。キリスト教会の権力が絶大であった中世において、文字の読めない大多数の民衆にとって、神の言葉を「聴く」ことは、即、信仰を意味した。しかし、近代に入り、また、視聴の立場は逆転する。印刷術の発明による画期的な識字率の高

まり、また、幾何学的遠近法の発見による立体的な描写により、視覚の優位性が確立された。現代では、視覚の優位性は、益々、顕著になり、「視覚の独走」、或いは、「視覚の専制支配」と呼ばれるほどに圧倒的な優位を獲得している¹²⁾。更に、コンピューター画面の virtual reality に慣れ親しんでいる現代の若者たちは、「視覚の人工化」にも晒されているといえよう。21世紀の現代という時代は、視覚を最高位に置いていることは明らかである。このように、視聴間の優位性は文化的要因に大きく左右されてきたことが判る。他方、生理学、心理学、言語学などの学問的観点からの決定的な論拠は、未だ、示されていない。現時点では、拙稿において、視覚と聴覚を同じ階層として扱うことが、望ましいと思われる。

2. 日英語における共感覚表現の比較——研究の目的と大要

2.1 目的

1では、共感覚表現に関する先行研究を概観したが、同時に、今後の課題も浮かび上がってきた。Ullmann, Williams によって示された、英語における共感覚的比喩の一定の方向性は、他言語にも適用可能な普遍的な特性と言えるものだろうか。日本語においても、同様な方向性の存在が、大方のところ認められてはいるが、幅広いデータ収集に基づく、より緻密な分析が望まれるところである。

本稿では、日本語の共感覚表現に用いられている語彙をなるべく網羅すべく抽出し、それらの履歴を調べることにより、日本の共感覚的比喩の方向性を明らかにしたい。そうすることにより、(1) Ullmann, Williams によって示された共感覚的比喩における上昇転移の方向性が、日本語についても適用されるか、否かが明確にされよう。更に、(2) 異なる方向性が見出されるならば、その相違部分は、両言語を保有する日英文化間の特殊性を反映するものとなるであろう。(共感覚表現の普遍性は共通項の中に、特殊性は相違点のなかにあるであろうから。)

但し、一口に共感覚表現といっても、構造的にも様々なタイプがあり、比較可能な範囲に限定せざるを得ない。本稿では、「形容詞＋名詞」構造に注目し、Williams によって提示された英語の共感覚形容詞 65 語に対置すべく、日本語における共感覚形容詞、及び、それに準ずる語（形容動詞の形容詞的用法）を収集し、各語の履歴を調べ、Williams の英語版との比較を試みる。

2.2 日本語の共感覚形容詞、及び、それに準ずる語のリスト作成

2-2-a) 共感覚語の認定：感情表現との関わり（外的感覚 vs 内的感覚）

人間が外部世界を認識する際に関わる感覚は、身体的（外部）感覚と精神的（内的）感覚との二つに大別される。前者を、つまり、人間が身体的に有している五感を通して感じたことを言葉で表現したものを「感覚表現」と呼び、後者を、つまり、内的感覚として精神的に感じたものを「感情表現」と呼ぶ。実際には、両者には深い結びつきが見られ、感情を表すために感覚

表現が用いられたり、身体的感覚を表すために感情表現が用いられたりする。

例えば、「美しい」は、本来、感情を表す語であったものが、視覚に訴える感覚語として用いられるようになり、更に、聴覚的な意味をも獲得してきた。このように、本来的には感覚語ではないが、後に感覚語に転移し、更に、五感内の他の感覚分野への転移が見られる語を、いかに扱うべきかが問題となるが、Williams はこのような語を、二次的感覚語（derivatively original sensory modality）と呼び、共感覚形容詞のなかに組み入れている。

拙稿においても、Williams に倣い、本来、感覚語ではないが、五感の中で意味の転移を起こしている語を、共感覚語としてリストに組み入れることとした。

2-2-b) 感覚表現の判定基準

次に、ある感覚表現が、主に、五感のうちどの感覚を通して獲得されたものなのかを判定する基準の設定が必要となる。本稿では、Williams に倣って、触覚、味覚、嗅覚、次元、視覚、聴覚という六つの感覚分野を設定することにしたが、具体的に、ある表現に用いられた共感覚語を六分野のいずれかに分類する作業において、判定基準を明確にしておく必要がある。判定基準は、吉村氏の設定基準を参考とさせて頂いた¹³⁾。

- 触覚： 肌を通して感知される感覚——皮膚（接触）感覚
振動覚の表現、温冷覚の表現、触、圧覚の表現、軽重の表現、痛覚の表現、感触など。
- 味覚： 口中の皮膚によって感知される感覚——接触性化学感覚
- 嗅覚： 鼻腔を通して感知される感覚——遠隔性化学感覚
- 次元： 本来は、視覚表現のなかに含められるものであるが、空間認識を表す語——視覚の一分野
- 視覚： 網膜に映る像を通して感知される感覚——遠隔感覚
すべての色彩語、明暗の表現、透明度の表現、形の表現、動きの表現
- 聴覚： 鼓膜の振動によって感知される感覚——遠隔感覚

以上、五感を六つの分野に区分した。（「次元」は、視覚分野に統合しても良いのだが、Williams の資料との比較の便宜を図るために、一分野として独立させた。）

2-2-c) 共感覚語の選定

『逆引き広辞苑』（1999、岩波書店）、『日本語大シソーラス』（山口翼編、2003、大修館書店）、『分類語彙表』（国立国語研究所編、2004、大日本図書）などを参考に、共感覚表現に用いられていると思われる形容詞、及び、それに準ずる語を抽出した。

2-2-d) 共感覚語の履歴調査

『日本国語大辞典』(2000～2002、小学館)には、出典例も多く、出典年も明記されている上、語誌、方言についての記載も随所に見られるため、この辞典を基本的に活用した。補助的に『広辞苑』(第5版、新村出編、1998、岩波書店)も使用して、各感覚語の履歴を調べた。尚、現代語の使用においては、近時なものほど、辞典への記載が望めないのは当然である。現代語としての判断のゆれを示す表現については、5人(20代～80代)の informants の意見を参考にした。

拙稿で扱う「形容詞+名詞」構造を形成する共感覚語は、以下の2タイプに限定した。

- (1) 形容詞：「ク」、「シク」活用の形容詞
- (2) 形容動詞に接尾語「な」をつけ、形容詞に変化させたもの

2-2-e) 共感覚語の通時的变化を示すリスト作成

a)、b)、c)、d) の手順を踏んで作成されたリストは、巻末付録Iに添付した。収集、分析された語の総数は、71語であった。各感覚の内訳は、以下のようである。

<表2>

触覚：	26語
味覚：	10語
嗅覚：	3語
次元：	16語
視覚：	14語
聴覚：	2語
計	71語

3. 日英語における共感覚表現の比較——考察

3.1 共感覚表現に用いられる感覚語の数における日英比較

他のメタファーと異なる共感覚的比喩の特色を、安井は、次のように挙げている¹⁴⁾。

- 1) 感覚固有の表現が少ない。
- 2) 固有の少数表現を除いた後に残る大多数の感覚表現の場合、メタファー以外の表現形式が存在しえない。

更に、固有感覚表現(五感のうち原感覚に属する語)の数は、未分化の低級感覚から分化の進んでいる高級感覚へ進むにつれ少なくなっていることが予想されると推測している。

では、共感覚的転移を引き起こす固有感覚表現の数において、五感の間にはどのような差があるのだろうか。また、この点において、日英語の間に、差異は見られるのだろうか。下表

を参照しつつ、比較を試みたい。尚、Williams による資料は、巻末付録Ⅱに収めた。

<表 3 >

	日本語	英語（Williams に基づく）
触覚：	26	27
味覚：	10	9
嗅覚：	3	0
次元：	16	17
視覚：	14	8
聴覚：	2	4
計	71	65

まず、収集された総共感覚形容詞の数は、日本語 71 語に対し、英語 65 語となり、僅かに日本語の方が多。

次に、語数の多い順に五感を並べてみると、以下のようになる。

<表 4 >

日本語：	触覚	—	次元	—	視覚	—	味覚	—	嗅覚	—	聴覚	
(語数)	26		16		14		10		3		2	= 71
英語：	触覚	—	次元	—	味覚	—	視覚	—	聴覚	—	嗅覚	
(語数)	27		15		9		8		4		0	= 65

以下、上記の<表 4 >を参照しつつ、考察を行う。

- ① 日英語ともに、最多の共感覚形容詞を擁する分野は、触覚である。これは、生物発生的にも、五感のうちで触覚が最も原初的であるという事実との平行関係を示唆して、興味深い。また、語数の多さは、「触覚が転移の主要供給者——優位の出自——である。」という Ullmann の発見を裏付ける可能性を持っている。
- ② 語数における二番手は、日英語ともに「次元」である。「次元」は、大小、上下、前後、高低、深浅、奥行きなどといった空間認識を表す語で、本来、視覚表現のなかに含まれるものであるが、その数は他の視覚表現の語と比べ、多い。日本語では、「次元」16 に対し、「視覚」14。英語では、「次元」15 に対し、「視覚」8 となり、各々ご本家を上回っている。これは、「人間は視覚的動物である。」という一般的見解に代えて、「人間は空間認識に依存度の高い動物である。」とした方が、正確を期すことになりそうだ。日英語に共通に見られるこの現象は、普遍的な性質のものかもしれないが、より確実性を増すためには、日英語以外の複数の言語による検証を待たねばならない。
- ③ 三番手、四番手に来る感覚分野は、日英語で逆転している。日本語では、「視覚」14 語、

「味覚」10語、これに対し、英語では「味覚」9語、「視覚」8語を示している。味覚語の数は、日英両語でほぼ同じであり、英語においては、視覚語の数は、味覚語とほぼ同じである。ここでの日英語の相違を形作っているのは、日本語における視覚語の多さといえよう。この事実は、日本語において、「視覚」が、共感覚的比喻の有力な供給者として働いている可能性が高いことを示しているといえよう。その「方向性」については、次節の考察に委ねることとする。

- ④ 五番手、六番手は、英語では、「聴覚」-「嗅覚」(4-0)、日本語では、「嗅覚」-「聴覚」(3-2)と逆転しているが、日本語において、この数の背後には、少々複雑な事情が絡んでいる。日本語の嗅覚用語として挙げられている語は、「こうばしい」、「かぐわしい」と「うるさい」の三語であるが、この内、「こうばしい」と「かぐわしい」は、語源的には同語である。一般的に、聴覚語として理解されている「うるさい」は、元々、感情語(ウルは「うら(心)」)、サシは「狭し」を指す。)であったものが、平安末頃から感覚語として使用され始めたものである。感覚語としての意味は、「虫、煙、匂いなど、まつわりつくものに対して感覚的に煩わしい」から始まり、後に聴覚への転移が見られる。更に、現代語では、視覚への転移が「うるさい色(彩)」といった表現に見られる。一方、嗅覚語としての使用が廃れてしまったために、現代人の我々にとって、「うるさい」は聴覚用語という印象が強いと言えよう。このような事情を鑑みると、日本語における嗅覚の共感覚形容詞の数は、二語(「こうばしい」と「かぐわしい」は各々、別の転移を示している)ので、独立して扱うこととした。)と見てよいだろう。

他方、聴覚語として挙げられている共感覚形容詞は「騒々しい」と「喧ましい」の二語であるが、前述の「うるさい」を加えると三語となる。通時的変化のこのような足跡を辿ると、日本語における「聴覚」と「嗅覚」の語数は、3乃至2対2乃至1となり、英語の「聴覚」-「嗅覚」(4-0)という線とほぼ同傾向と考えてよいと思われる。それよりも聴覚語と嗅覚語の両分野における注目すべき特徴は、日英両語に共通して、語数の圧倒的な少なさである。この二つの感覚分野における語数の少なさを何を意味するのかを次に考察したい。

まず、聴覚語の少なさは、Ullmann 指摘の第三の傾向——転移の主要受容者は聴覚である——の裏付けとなり得る。

さらに、「感覚の抽象度が高くなるにつれ、識別可能な感覚対象の数は飛躍的に増大するが、固有感覚表現の数はそれに伴った増え方を示さない。その落差の分だけ、より高級な感覚表現へと低級感覚の方から駆り出されるのが、共感覚メタファーなのである。」¹⁵⁾ という上昇転移に対する安井の理論の裏付けの一端を荷いそうである。つまり、高級感覚である聴覚において、表現の対象となる感覚は沢山あるのに、それを表す固有な言葉がないために、他感覚の言葉から駆り出してくるしか他に方法がないことになる。換言すれば、「意味あり、表現なし」の切羽詰ったところに生まれるのが、共感覚メタファーであり、その最たる例が聴覚ということである。しかし、この論は同じく高位の感覚である視覚分野に属する語の多

さを説明しえない。

次に、嗅覚語の少なさを何を意味するのであろうか。日本語の嗅覚語は、「かぐわしい」と「かんばしい」の二語が挙げられたが、前述のように、この二語は語源的には同語である。今では廃れてしまった嗅覚語としての「うるさい」は、本来的には感情語である。他方、英語では嗅覚固有の感覚語は皆無とされている。Williamsによるとギリシア語においても同様である¹⁶⁾。従来、嗅覚語の少なさは、人間の嗅覚の鈍さに帰着されてきた。これは、生物学的観点からも納得できそうである。他の動物と比べ、確かに、人間の嗅覚は鈍いといえる。例えば、人間の嗅覚は犬のその1,000分の1とも2,000分の1とも言われる。しかし、言葉を持たない動物との比較の上に、そのような結論を下すのは性急すぎるかもしれない。同じく語彙数の少ない聴覚と嗅覚において、一方は、その抽象度の高さ故とされ、他方は、「鈍さ」を指摘されるのは、不公平に思われる。むしろ、「言語化することの難しさ」において、この両者は生理学的な共通点を有しているのかもしれない¹⁷⁾。文化的にも、両者の親密度の高さを証明する現象がいくつか挙げられる。19世紀後半のイギリスで考案された「香階」は、音階（聴覚）と香調（嗅覚）とを結びつけたものであるし¹⁸⁾、また、香を焚いて香りを心で聞き分ける「聞香」は、その命名からして既に、聴覚と嗅覚のドッキングである。さらに、茶の香りとの味の弁別をして勝負を競う「聞茶」において、完成された調合香料は、「ある響きをもった音楽に等しい」とも表現されるようで¹⁹⁾、ここにも嗅覚と聴覚の親密性が伺われる。また、昨秋（2006年9月）、音楽を香り付きで提供する「香るラジオ」が、某会社と某ラジオ局との協力の下に始められることが発表された²⁰⁾。この新サービスは、ラジオ番組で紹介する曲のイメージに合った香りを調合するファイルをネット配信し、聴取者の自室に置いた香り発生装置を作動させる仕組みになっており、曲と香りを同時に楽しめるといふ。因みに、香り発生装置には6種類の香料が内蔵されていて、それらを調合して香りを発生する仕組みになっているということである。10月から特定ラジオ番組を対象に実施されたこの「香るラジオ」は、聴覚と嗅覚との間に生理学的な親密性を強く感じさせずにはおかない。

更に、近年、文化史の視点から「匂い」を論じた刺激的な論考が、発表されている²¹⁾。「匂い」は、名付けようもなく、とらえどころのないために、合理的、直線的思考を旨とする近代西欧の世界観と対立し、抑圧され、貶められてきた経緯を辿り、「匂いの復権」を唱えるこの社会学的、人類学的視点は、近代西欧文明が行き詰まりを見せている今、現代人にとって非常に示唆的であると思われる。この論によれば、人間の嗅覚は非常に鋭いのである。

日英語の共感覚語の数の比較と考察を、ここまで行ってきたが、全体的に見て、両語の各感覚語の数は、五感の間で同じようなバランスを保つことが判った。唯一、歴然たる相違が見られるのは、日本語における視覚用語の豊富さである。用語の多さは、他感覚分野へ駆り出されるストックの多さを示す。つまり、他感覚への転移の可能性が高いことを意味する。この転移の方向は、Williamsの予測に従った上昇転移であるのか否かは、次節で検討する。

3.2 共感覚表現の方向性に関する日英比較

この節では、Ullmann によって指摘され、Williams によって確認された、英語における共感覚的比喩の転移の方向性——分化度の低い感覚から文化度の高い感覚への上昇方向——を、日本語で検証することを第一の目的とする。日本語において同様な傾向が見られるか否かを、Williams の提供した英語の共感覚形容詞との比較という形で検討した。比較に際し、下記に示す表を作成した。これにより、上昇、下降転移の方向性を一目瞭然に見渡すことが出来る。尚、Williams の収集した英語 65 語については、通時的変化が激しく、一旦は転移を引き起こしたものの、その後廃れてしまい、‘Modern Standard English’として生き残れなかった表現（語法）が少なくない。彼はこれを、上昇転移という法則に沿わない変化をおこした語法の自然消滅であると分析している²²⁾。このような自然淘汰により、上昇転移という普遍性が高められると述べているのだが、その検証をも兼ねて、Williams のデータは、二つの表（表 5, 6）に分けることとした。一方、日本語に関しては、自然消滅という通時的変化を起こした語は非常に少ないため、一つの表（表 7）にまとめた。

<表 5> Williams a) 下降転移例の自然消滅前

共 原	触 (27)	味 (9)	嗅 (0)	次 (15)	視 (8)	聴 (4)	計
触覚		21	7	3	12	20	63
味覚	3		5	0	3	5	16
嗅覚	0	0		0	0	0	0
次元	1	6	0		4	17	28
視覚	0	0	1	0		8	9
聴覚	0	2	1	0	4		7
計	4	29	14	3	23	50	123

<表 6> Williams b) 下降転移例の自然消滅後

共 原	触 (27)	味 (9)	嗅 (0)	次 (15)	視 (8)	聴 (4)	計
触覚		13	5	1	9	18	46
味覚	0		3	0	0	4	7
嗅覚	0	0		0	0	0	0
次元	0	2	0		3	16	21
視覚	0	0	1	0		8	9
聴覚	0	0	0	0	4		4
計	0	15	9	1	16	46	87

<表 7> 日本語共感覚形容詞

共 原	触 (26)	味 (10)	嗅 (3)	次 (16)	視 (14)	聴 (2)	計
触覚		11	4	0	21	21	57
味覚	1		4	0	5	6	16
嗅覚	0	1		0	2	2	5
次元	3	5	2		6	12	28
視覚	3	5	2	0		12	22
聴覚	0	0	0	0	2		2
計	7	22	12	0	36	53	130

まず、総転移数に対する下降転移数の割合を検討してみよう。

<表 8>

	総転移数	下降転移数	下降転移の割合
Williams a)	123	14	11%
Williams b)	87	3	3%
日本語版	130	22	17%
(Ullmann	2009	344	17%)

注) 参考までに、Ullmann によるデータも付記した。

英語においては、下降転移の割合は、Williams の言う自然淘汰により、11%から3%へと減少している。上昇転移という規則性の精度を高める方向に向かうとした Williams の推論は一応肯定できるといえる。

他方、日本語の下降転移率は17%を示し、Williams のデータよりも下降転移率が高いといえよう。しかし、Ullmann の示した数値もほぼ同じ割合（比較の対象が異なるが）である。更に、17%の下降転移は、83%の上昇転移を意味する訳で、英語に見られた上昇転移の規則性は、概して、日本語にも見られると言ってよいだろう。

従って、Ullmann, Williams によって指摘された共感覚的比喩における上昇転移の方向性は、日本語でも確認されたことにより、他言語にも共通する普遍性を持ちうる可能性ありと認めることができる。

さらに、Ullmann が指摘した他の二点も検証された。つまり、転移の主要な供給者は、触覚（日本語：57/130, 英語：63/123, 46/87）であり、主要な受容者は、聴覚（日本語：53/130, 英語：50/123, 46/87）である。

さて、Williams の英語版よりも高い数値を示した日本語の下降転移の内訳を分析してみよう。総転移数130件中、下降転移数は、22件である。

<表9>

味覚——触覚：	1例	(ねじが「甘い」)
嗅覚——味覚：	1例	(「こうばしい」味)
次元——触覚：	3例	「厚い」「薄い」「深い」
——味覚：	5例	「浅い」「薄い」「大きい」「細やかな」「(奥) 深い」
——嗅覚：	2例	「浅い」「深い」
視覚——触覚：	3例	「淡い」「濃い」「爽やかな」
——味覚：	5例	「淡い」「濃い」「爽やかな」「丸い」「まるやかな」
——嗅覚：	2例	「淡い」「爽やかな」

上記<表9>により、「次元」と「視覚」からの下降転移が多いことが判る。元来、「次元」は、「視覚」に含まれるべき下位分野であることから、ここで、両者を併せて考察を進めたい。これにより、事実がより鮮明に浮かび上がることが予測される。「次元」を含めた「視覚」からの下降転移は、総下降転移数22例中、20例であるから、全下降転移の91%を占めている。その内訳は、以下のようである。

<表10>

視覚——触覚：	6例
——味覚：	10例
——嗅覚：	4例

「視覚」から「聴覚」への上昇転移(「視覚」と「聴覚」は、拙稿において、同等に扱っているため、厳密には、これは、「下降でない転移」或いは、「平行転移」ということになる。)の数、24例に対し、「視覚」からの下降転移の数が20例という数値により、日本語においては、「視覚」の固有感覚語が他の感覚分野へ、方向を問わず、多く駆り出されていることが明らかとなった。これは、前節で検討した通り、日本語における視覚用語の豊富さが、他感覚への駆り出しを容易に可能にしているということであるが、同時に、日本語及び、その文化の特徴を表しているとも言えよう。つまり、まずは、視覚用語の豊富さにおいて、次に、共感覚表現に駆り出される用語の数とその縦横の方向性といった重層的な現象に、外界認識における日本人の「視覚」への依存度の高さが表れているといえる。

次に、「視覚」から下降転移に駆り出された視覚用語を具体的に検討することにより、日本人が「触覚」、「味覚」、「嗅覚」をそれぞれ、どのように捉えているかを検討してみたい。

まず、「視覚」——「嗅覚」の線は、「淡い」、「爽やかな」、「深い」、「浅い」の4例が見られる。「淡い香り」や「爽やかな香り」は、よく耳にする表現である。また、「深い」は、例えば、「コーヒーの深い香りと味わい」のように使うと、こくのある濃い香りと味を連想させて、

自然な表現である。「浅い」は、「深い」とともに、嗅覚用語として源氏物語（1001～14）に登場している（香りの付き方が少ないの意で使われた。）が、現代語では、「浅い香り」とは言わない。通時的变化の過程における数少ない自然消滅の例といえよう。「視覚」から「嗅覚」に駆り出されている語は、現在の時点では、3語ということになるが、嗅覚を視覚的に捉え、表現する日本の特徴は、実は、「匂う」ということは、そのものの語源にも見ることができる。「匂ふ」は、元来、もみじや花などの赤があざやかに映えていて「赤い色が際立つ」の意で、視覚に関する語であったのだが、万葉時代（奈良時代：710-784年）には既に嗅覚表現にも用いられているということである²³⁾。

英語でも、「視覚」——「嗅覚」は、1例（faint）挙げられている。

次に「視覚」——「味覚」の線は、10例を示し、日本人がいかにか「味」を視覚的に捉えているかを物語っていると言える。では、具体的な表現を検討してみよう。「淡い」、「濃い」といった色彩の濃淡感覚、「爽やか」といった色彩のあざやかさの感覚、「丸い」、「まろやかな」といった形の感覚、「浅い」、「薄い」、「大きい」、「細やかな」、「（奥）深い」といった空間認識に関わる感覚などによって、味覚を認識し、表現していることが判る。日本人は、「食彩」の言葉の示す如く、「彩り」を大切に、食す前に、まず、目で見て楽しむ。さらに、器の豊富さも形や空間認識の語を借用した表現に反映しているように思われる。日本料理に具される器は、その二次元的な形、サイズも、実に多種多様である上に、「深さ」（つまり、三次元的な形）においても西洋食器と比べ、ヴァリエティに富んでいる。西洋料理では、スープ皿は少々深い、——それは、主に、汁物を盛り付けるという実用的理由に拠るといえる。——その他は、比較的平皿が多い。それに比べ、日本料理における食器の深浅は、実用的な理由だけでなく、見た目の美しさに訴えるための美的要素が大きく関わっているように思われる。会席料理などで目にする深鉢の奥に楚々として装られた和え物、煮物などに、色彩の美だけでなく、奥深い妙味を感じるのも、器の奥行きを成せる技であるかもしれない。器の奥行きは、料理とその盛り付けの立体感に通じ、それが、「味」を空間認識によって表現する方向に向かわせたのかもしれないが、その逆の可能性も否定できない。つまり、日本人が「味」を空間的に捉えることにより、深浅様々の器が生まれたという可能性もある。いずれにせよ、日本人が、「味」を空間認識によって形容する事実が確認された。

視覚的美観を大切にする日本料理の特徴は、「装る（よそる）」という言葉にも表れている。料理を器に盛り付けることを「装る」というが、この語は、「装う（よそおう）」と「盛る」とが混交した語であり、料理を盛り付けることは、単に、器に料理を移すだけでなく、「装うこと」（＝飾りととのえること）でもあるのだ。因みに、英語では、固形物を盛る場合は、*pile, dish up* (*place, set* は、料理を盛ることよりも、皿やグラスなどの食器を定位置に置く意味で使われるようだ)、液体の場合は、*pour* を用いるが、このいずれにも、「装う」という意味合いは含まれない。英語文化において、料理を皿に盛ることは、極めて実用的な所作と言えよう。（英語文化圏の人々が、料理を皿に盛り付ける時に全く美的要素に配慮しないということでは

ない。飽く迄、相対的な話である。)

参考のため、英語における「視覚」から「味覚」への共感覚的転移を見てみよう。かつては、「視覚」から「味覚」への例は、6例 (いずれも、空間認識) 見られたが、その内、Standard Englishとして生き残っているのは、flat と thin の2語のみである。flat は、「味のない、単調な」という意味で使われ、thin は、「薄い」と通ずる意味合いで用いられているようである。他方、廃れてしまった4語は、acute, fat, high, small である。acute は、「鋭い」、fat は、「脂っこい」、high は、「<獲物の肉が>ちょうど食べごろになった、腐りかけている」、small は、「つまましい、ささやか」といった意味合いが現代語にも残されているが、このうち、特に、fat taste と high taste は、意味の上から現代でも使えそうな気がする。(因みに、acute の原感覚は、Williams によると、「次元」であるが、日本語では、「鋭い」の原感覚は、「触覚」である。) しかし、現実には、この4語は、「味覚」の形容語としての使命を終えている。Williams によれば、これらは、上昇転移という法則への違反ゆえに、普遍性へ収斂していく過程で自然淘汰されたと説明されるのだが、僅かではあるが、別な解釈の余地もある。つまり、元来、「視覚的な動物」である人間が、「味覚」を視覚的に捉えても不思議はなく、逆に、何らかの理由で、英語文化において視覚離れという特殊な方向に動いてきたのかもしれないという推測もできる。この見方からすると、普遍への収斂ではなく、逆に、特殊性へ向かっていることになる。「視覚」——「味覚」の線の濃厚な日本型とその線の弱体化の英語型との間に、普遍性と特殊性とが、どのような絡まりを示しているのか、この点に関しては、日英語以外の複数の言語による研究と検証が必要である。

最後に、「視覚」——「触覚」の線を検討しよう。「淡い」、「濃い」、「爽やかな」、「厚い」、「薄い」、「深い」の6例が挙げられる。このうち、「爽やかな」を除く5語は、すべて液体、或いは、気体などの濃度や密度を表す表現として使われる。ここで、「液体や気体の濃度」を触覚に分類することが適切であるか否かが、問われることになるが、Williams は、viscosity (液体などの粘度) を触覚に分類している。さらに、液体、気体ともに濃度は視覚によっても、ある程度捉えられるものであるが、人間の習性として、実際に触って肌で感じることの方に、より確実性を置いているように思われるので、触覚に分類することが妥当であると判断した。

しかし、そのような皮膚感覚を表現するにあたって、視覚の固有表現を用いる事実は、視覚的動物といわれる人間の生物的要因に起因するものなのか、或いは、「視覚的」と言われる日本文化の特殊性によるものなのか、この点に関しても、判断は日英語以外の複数の言語による同様の資料収集と分析に待たねばならない。因みに、英語においては「視覚」——「触覚」の例は、1例、small が挙げられているが、既に、廃れた表現とされている。

Williams によって提供された英語の共感覚形容詞 65 語と今回収集された日本語の共感覚形容詞 71 語の通時的変化 (履歴) の調査とその分析により、以下のことが明らかになった。

1) Ullmann, Williams によって指摘された英語における共感覚的比喩における上昇転移の方向性は、日本語の共感覚形容詞においても確認された。五感の間で、分化度の低い感覚分野か

ら分化度の高い分野へ、感覚用語が駆り出される度合いが高いことが認められた（日本語：83%、英語：89%～97%（Williams）、83%（Ullmann））。

2) 但し、英語と比べ、日本語では、視覚用語の数の多さとそれらの他感覚分野への縦横無尽の転移が際立っていることが判明した。「視覚」からの下降転移数は20件を示し、上昇転移数（或いは、平行転移と呼ぶべきか）24件に迫っている。これは、「視覚的文化」と呼ばれる日本文化の特殊性を表していると解釈して良いかもしれないが、英語においても、かつて、「視覚」から「味覚」への転移の例が6例見られたことから、視覚の優位性は、「視覚的動物」といわれる人間の普遍性を示している可能性も考えられる。この点に関しては、他の複数言語による、同様な資料収集とその分析により、その普遍性と特殊性との綾が、より鮮明に映し出されるだろう。

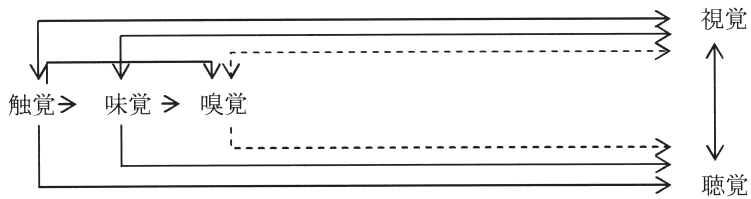
最後に、共感覚表現の日本の特徴として、先行研究により加えられた「触覚」——「嗅覚」と「味覚」——視覚」の二方向の転移を Williams のデータとの比較により、検証しておかなければならない。まず、「触覚」——「嗅覚」の線について。國廣は、その著書、『意味論の方法』（1982）の中で、「『スルドイ匂』がありそうで、そうすると‘touch - smell’の線が必要ということになる。」²⁴⁾と述べている。山梨も『比喩と理解』（1988）において、「さすような香り」、「つくような臭い」の例をあげて、この線の存在を認めている²⁵⁾。

実は、Williams のデータでも、「触覚」から「嗅覚」への転移例がないわけではない。過去に挙げられた7例中、2例の消滅により5例になったが、この5例は現代語として有効である。一方、今回の日本語の形容詞においては、4例のみである。このような状況を鑑みると、「触覚」——「嗅覚」を日本の特徴と判断するには証拠不十分と言わざるを得ない。実際、日本的な表現として挙げられた「突くような臭い」や「刺すような香り」といった言い回しは、アメリカの文学作品にもその使用が見られる²⁶⁾。この線は、日本的な特徴というよりは、日英両語に共通して見られる方向と解釈すべきではないだろうか。Williams は、5例という数を取るに足らぬとして、この線を重要視しなかっただけなのかもしれない。

次に、「味覚」——「視覚」の線について検討してみる。Williams のデータでは、かつて3例見られたが、その後すべて消滅してしまい、現代語としては、皆無である。日本語では、5例挙げられる。「甘い赤」、「渋い色」、「苦い顔」、「まずい顔」「しょっぱい顔」といった表現である。味覚にこだわりのある日本文化の特徴を反映した共感覚的転移として、この方向は認められるといえそうだ。

以上、共感覚表現の方向性について論じてきたが、今回の日本語の共感覚形容詞の資料収集と分析とによって得られた、日本語に特徴的な転移の方向性を次図に示した。便宜上、「次元」は、「視覚」に吸収、統合させた。

<図4> 日本語の共感覚形容詞の転移の方向



4. おわりに —— 共感覚表現における普遍性と特殊性についての考察

拙稿では、主に、共感覚形容詞に焦点を当て、共感覚表現の“方向性”における普遍性と特殊性との綾を考察してきたが、ここでは、別な角度からの論を紹介しつつ、共感覚現象の普遍性と特殊性とについての考察を行いたい。

松岡は、『色彩とパーソナリティ』（1983）のなかで、色そのものの心理的性質から生ずる色の感情的意味が、共感覚現象に深く関わっていると論じている。例えば、目に暖かく見える色は、暖かい感じを与え、重く見える色は、重苦しい感じを与える。また、ブルーのカーテンや家具調度に包まれた部屋に入って、涼しさを感じるのは、ブルーを見た時の視覚体験と涼しいところに入った時に感ずる体感（皮膚感覚）との間の共感覚現象であると述べている。更に、「若い女の子のキイキイ声をきくと、視覚的な経験である黄色を感ずる。だから、「黄色い声」ということばが生まれてくるのである。」と述べ²⁷⁾、日本語固有の「黄色い声」という表現を色聴現象の一つとして片付けている。彼は、又、「哀調をおびた音楽のことを「青い音楽」というアメリカ人の感覚と、「ほの青きソロのピアノ」という白秋の表現との間には、民族と文化伝統の差異を超えた一致が見られる。」²⁸⁾ とし、特に、色彩に関わる共感覚現象における国際的な共通性を強調している。実際、日本とアメリカの大学生を対象に行った調査によっても、色の感情的意味の国際的な共通性が認められたとしているが、問題は、日本とアメリカという、今や、文化的に似通った二者の比較により、“国際的”という言葉を用いて、一般化してしまってよいかどうかという点にあると思われる。色のもつ感情的意味は、果たして、民族と文化を超えて同じであるのだろうか。

池上は、『意味の世界』（1978）において、「共感覚というのは人間の知覚面での特徴であり、当然人間の文化的というよりは生物的存在としての共通性が強く現われてくるのであろうから、その意味で異なる言語間に共通の共感覚的表現が出て来たり、どの感覚からその感覚に転用されるかという点に関して共通の傾向が認められたりしたとしても、特に不思議ではない」²⁹⁾ と共感覚の普遍性に重心を置きつつも、それでも言語間で差が出てくることもあるとして特殊性についても言及している。先に、松岡によって色聴現象として片付けられてしまった「黄色い声」を文化的に特殊な表現として挙げている。英語には、yellow voice などという表現はないし、<かん高い声>であるという意味の見当も、英語母語話者にはつかないというのが

一般的な反応のようだと述べている。

では、〈かん高い声〉を意味する日本語の「黄色い声」の表現はいかにして生まれたのか。さらに、共感覚表現のなかで普遍的なものと特殊なものとは、いかにして判別されるのか。安井は、『言外の意味』（1978）において、興味深い分析を行っている。彼は、共感覚表現には、場面想起方式と連語方式との二種のタイプがあるとし、前者が万国共通であるのに対し、後者は国境を越えられない、つまり、特定の文化にしか見られない特殊なものであると説明している。場面想起方式の例として、‘hot jazz’が挙げられている。‘hot jazz’は、「即興曲を入れた熱狂的なジャズ」のことで、本来触覚語である‘hot’が聴覚語へと転移した共感覚表現である。確かに、熱狂的な音楽が奏でられる場面は、熱気に溢れている。この場合、問題となる場面を頭に思い浮かべさえすれば、納得できる。日本語においても「熱い」には、「心が高ぶって身内が熱くなるさま、情熱のはげしいさま」（日本国語大辞典）といった意味がある。‘hot jazz’は、場面から決定できる表現である。では、場面を思い浮かべても納得できない類の共感覚表現とは、どのようなものであるのか？ 著しい不確実性の例として、安井は、「黄色い声」を挙げている。「（女、子供の）かん高い声」をなぜ「黄色い声」と呼ぶのか。どうして「黄色」なのかという問いに対して、彼は、次のように推論している。まず、「かん高い声」が存在しているとき、その声と結びつきうる黄色い（と感ぜられる）ものを探すと、「くちばしの黄色い」もの＝「ひよこ」と言う方程式が成立する。これは、あくまで一つの可能な答えとして提示されているにすぎないのだが、このように、連語方式でなければ処理できない場合、探し求めるのは直接的な「もの」の世界ではなく、ことばの世界であるため、この種の共感覚表現には国境ありとして、その文化特殊性を認めている。yellow voice という形を創造して「黄色い声」と等価な表現として受け取ってもらうことの困難さにおいて、その表現の特殊性が露見しているといえよう。このように、安井の提示した場面想起方式と連語方式という枠組みは、共感覚表現に内包された普遍性と特殊性とを分析するうえで、役立つように思われる。

さらに、國廣は、『構造的意味論』（1967）において、共感覚用法の一般性を前に、神経生理学的な裏づけがあるのではないかと予想し、「共感覚用法は、各感覚領域をつかさどる脳細胞（ニューロン）の群が互いに連絡し合っていることを予想させる」^{30）}と述べている。意味分析にこのような視点が加わることにより、共感覚表現の万国共通部分の解明が更に、進展することと思われる。

最後に、エチオピア西南部に位置するボディ社会の色と模様民族誌を『認識と文化』（1991）にまとめた福井の見解を紹介しておこう。「生理学的にいうと、人類に色彩の識別能力の差はないということになる。にもかかわらず、社会によって色彩基本語をふくめた色彩認識にちがいがみられるのは、文化の特性によるものであり、網膜の生理解剖学的なちがいなどによるものではないのである」^{31）}と述べ、色彩の認識や分類体系を決定するうえで文化というファクターの果たす役割を重視している。日本人は、「太陽はアカである」ことを信じて疑わないが、別な社会では、太陽は「白」であったり、「黄」であったりする。これは、太陽そ

のものの実体は同じであるのに、それをとらえる人間社会の認識によって生ずる差異であるが、単に、色彩というひとつのレベルの認識や分類体系の差異を以ってして、即文化の違いと片付けてしまうことの弊をも、福井は強調する。彼によれば、文化の探究には幾層かのレベルの認識や分類体系の重層的連関性の追究が必須である。そのように、ひとつの社会、ひとつの文化という個別なものを徹底的に追究していけば、やがて、普遍性への扉が開かれていく可能性があるのではないかと述べている。“個別”の徹底的な追究が普遍性に繋がるという、一見、逆説的なこの説は、「普遍性は、かならずしも相対性と対立するものではなく、両者は相補的な関係にある」³²⁾ という表現となって表出されている。文化を重層的な連関性のうえに捉える彼の姿勢は、言語の研究にも非常に示唆的であるといえよう。

註

- 1) Stephen Ullmann, *The Principles of Semantics*, Glasgow: Jackson, Son & Co. 1951. Rpt. Basil Blackwell, Oxford, 1958 2nd ed., 1959. ウルマン『意味論』山口秀夫訳、紀伊国屋書店、1964、p.285。
- 2) 同訳 p.290。
- 3) 同訳 P.296。
- 4) 國廣哲彌『意味論の方法』大修館、1982、p.124。
- 5) 國廣哲彌「五感をあらかず語彙—共感覚比喩体系」(『言語』第18巻11号、大修館、1989) p.28。
- 6) 同 p.31。
- 7) 山梨正明『比喩と理解』東京大学出版会、1988、p.59。
- 8) 同 p.60。
- 9) 村田忠男「さわることば」(『言語』第18巻11号、大修館、1989)、p.65。
- 10) Joseph M. Williams, “Synaesthetic Adjectives” *Language* 52:2, Baltimore: Waverly Press, 1976, p.472。
- 11) *Ibid.*, p.472。
- 12) 中村雄二郎『中村雄二郎著作集(第5巻)共通感覚』岩波書店、1993、pp.51-53。
- 13) 吉村耕治『英語の感覚と表現』三修社、2004、pp.19-24。
- 14) 安井稔『言外の意味』研究社、1978、p.133。
- 15) 同 pp.135-136。
- 16) Williams 前掲論文、p.472。
- 17) Trygg Engen, *The Perception of Odors*, New York: Academic Press, 1982. エンゲン『匂いの心理学』吉田正明訳、西村書店、1990、pp.112-118。[嗅覚語の特色は、個性的(idiosyncratic)であると同時に貧弱であるが、それは、そもそも、匂いと言葉の連合をつくること、つまり、匂いを命名することが難しいからであると述べている。Engen等の実験によると、「命名能力」の低いニオイの記憶の方が、「命名能力」の高い視覚の記憶よりも長持ちする結果となった。把持期間(1日～1ヶ月)が長くなるにつれ、視覚的記憶は急速に低下するが、ニオイの記憶はほとんど低下傾向を示さないという結果は、分析可能な属性を多く持つ視覚と分析可能な側面を持たない嗅覚、各々の特徴を捉える上で、興味深い。]
- 18) 中村祥二『香りの世界をさぐる』朝日新聞社、1989、p.260。
- 19) 諸江達男『香りの風物誌』東洋経済新報社、1976、p.173。
- 20) 毎日新聞記事、2006、9/5(火)「香るラジオ」。
- 21) Constance Classen, David Howes and Anthony Synnatt, *Aroma: The Cultural History of Smell*, London and

- New York: Routledge, 1994. クラッセン他『アローマ—匂いの文化史』時田正博訳、筑摩書房、1997。
- 22) Williams 前掲論文、pp.464-467。
- 23) 小町谷朝生『色彩のアルケオロジー』勁草書房、1987、pp.128-137。
- 24) 國廣前掲書、『意味論の方法』大修館、p.124。
- 25) 山梨前掲書、『比喩と理解』東京大学出版会、pp.57-61。
- 26) 上垣公明「Ernest Hemingway の感覚と表現」（吉村前掲書、『英語の感覚と表現』三修社、2004）、pp.242-251。
- 27) 松岡武『色彩とパーソナリティ』金子書房、1983、pp.42-46。
- 28) 同 pp.42-46。
- 29) 池上嘉彦『意味の世界』日本放送出版協会、1978、p.142。
- 30) 國廣哲彌『構造的意味論』三省堂、1967、pp.98-99。
- 31) 福井勝義『認識と文化』東京大学出版会、1991、p.34。
- 32) 同 p.39。

参考文献

1. 書籍

- Berlin, Brent and Paul Kay (1969) Basic Color Terms: Their Univesality and Evolution
Berkeley and Los Angeles: University of California Press
- Classen, Constance (1993) Worlds of Sense: Exploring the Senses in History and across Cultures. London:
Routledge [陽美保子(訳)(1998)『感覚の力』工作舎]
- Classen, Constance, David Howes and Anthony Synnott (1994) Aroma: The Cultural History of Smell.
London and New York: Routledge [時田正博(訳)(1997)『アローマ-----匂いの文化史』筑摩書房]
- Dixon, R. M. W. (1997) The Rise and Fall of Languages. Press Syndicate of the University of Cambridge.
[大角翠(訳)(2001)『言語の興亡』(岩波新書)岩波書店]
- Engen, Trygg (1982) The Perception of Odors. New York: Academic Press. [吉田正明(訳)(1990)『匂いの心理学』西村書店]
- 福井勝義(1991)『認識と文化——色と模様の民俗誌』(認知科学選書 21) 東京大学出版会 池上嘉彦
(1978)『意味の世界——現代言語学から視る』(NHK ブックス 330) 日本放送出版協会
- 小池清治、河原修一(2005)『語彙探究法』(シリーズ<日本語探究法>; 4) 朝倉書店
- 小町谷朝生(1987)『色彩のアルケオロジー』勁草書房
- 國廣哲彌(1967)『構造的意味論——日英両語対照研究』(ELEC 言語叢書) 三省堂
- 國廣哲彌(1982)『意味論の方法』大修館
- 松岡 武(1983)『色彩とパーソナリティー：色でさぐるイメージの世界』(ラポール双書) 金子書房。
- 諸江辰男(1976)『香りの風物誌』東洋経済新報社
- 中村祥二(1989)『香りの世界をさぐる』(朝日選書 378) 朝日新聞社
- 中村雄二郎(1993)『共通感覚』(『中村雄二郎著作集』第5巻、全10巻) 岩波書店

佐藤信夫 (1992) 『レトリック感覚』 (講談社学術文庫) 講談社

谷口一美 (2003) 『認知意味論の新展開』 研究社

Ullmann, Stephen (1951) *The Principle of Semantics*. Glasgow: Jackson, Son & Co Reprint. Basil Blackwell, Oxford, 1958 2nd ed. 1959 [山口秀夫 (訳) (1964) 『意味論』 紀伊國屋書店]

Ullmann, Stephen (1962, rpt, 1964) *Semantics: An Introduction to the Science of Meaning*. Oxford: Basil Blackwell [池上嘉彦 (訳) (1969) 『言語と意味』 大修館]

山梨正明 (1988) 『比喩と理解』 (認知科学選書 17) 東京大学出版会

山梨正明 (1995) 『認知文法論』 ひつじ書房

安井 稔 (1978) 『言外の意味』 研究社

吉村耕治 (2004) 『英語の感覚と表現』 三修社

2. 論文

國廣哲彌 (1989) 「五感をあらかず語彙—共感覚比喩的体系」 (『言語』 第 18 卷 11 号、大修館) 28-31

村田忠男 (1989) 「<触覚>さわることば」 (『言語』 第 18 卷 11 号、大修館) 62-67

武井邦彦 (1989) 「<視覚>色彩と形態と言語」 (『言語』 第 18 卷 11 号、大修館) 8-45

Williams, Joseph M. (1976) “Synaesthetic Adjectives: A Possible Law of Semantic Change,” *Language* 52:2, Baltimore: Waverly Press, 461-78

上垣公明 (2004) 「Ernest Hemingway の感覚と表現」 (吉村耕治編、『英語の感覚と表現』 三修社) 242-251

3. 辞書類

岩波書店辞典編集所 (編) (1999) 『逆引き広辞苑』 第 5 版対応 岩波書店

国立国語研究所 (編) (2004) 『分類語彙表』 (国立国語研究所資料集 14) 大日本図書

新村 出 (編) (1998) 『広辞苑』 第 5 版 岩波書店

小学館国語辞典編集部 (編) (2000-2002) 『日本国語大辞典』 第 2 版 小学館

山口 翼 (編) (2003) 『日本語大シソーラス：類語検索大辞典』 大修館

4. その他

毎日新聞 (2006,9/5 (火)) 「香るラジオ-----レシピネット配信、音楽に合わせ発生」

付録 I

日本国語大辞典、広辞苑により調べ上げられた共感覚語の通時の変化を下記の表に示した。各感覚語の横の数字は、その表現が用いられた用例の出典年を示す。年号は、すべて、日本国語大辞典からの情報による。年号につけられた〔 〕は、その表現が既に廃れていることを示す。用例はないが、意味の叙述により明らかにその分野に属すると判断できる場合は、___で示した。尚、日本国語大辞典にはないが、広辞苑にその用例が見られる場合は、(広)と記した。方言の中に、意味が確認された場合は、(方言)とした。また、どの辞書にも用例が見られないが、明らかに現代語として使用されている場合も、()で示した。現代語として判断の揺れを示す表現については、5人(20代～80代)の informants からの 3/5 以上の賛成を以って認定することとした。

触覚<形容詞>

	触覚	味覚	嗅覚	次元	視覚	聴覚
1. 粗い	8c後半	()				
2. あたたかい (温、暖)	1780				()	1909
3. あつい (暑、熱)	970				()	()
4. 重い	720	()			1817	1906
5. かたい (堅、硬、固、難)	1001				1714	1871
6. 軽い/軽やかな	1104~10	1912~13			()	1430
7. 木目細かな	1674	()				
8. けばけばしい	17c前				1909	
9. 険しい	898				1927	1710
10. 寒い/寒々しい	7c後~8c				1909	()
11. しなやかな	1717				1001~14	()
12. 湿っぽい	1765		1900~01		()	1950
13. 涼しい	720				1001~14	1900
14. 滑っこい	1801	()				()
15. 鋭い	1867		()		1952	1886
16. たおやかな	10c終				1170	()
17. 淡白な	1477	1678			1798	
18. 冷たい	10c終				1905	()
19. 艶々しい	1818				1919	()
20. 刺々しい	1910				1952	()
21. 滑らかな	858	()				1885
22. 鈍い	10c終				1911~13	1921~37
23. 粘っこい	1929~30	()			1973	()
24. ふくよかな	1001	()	(広)		1913	()
25. やわらかい (柔、和、軟)	1774	()	1909		1948	1897
26. ゆるい	1105	()				

味覚<形容詞>

	触覚	味覚	嗅覚	次元	視覚	聴覚
1. あぶらっこい (脂,油)		1919	1932			
2. 甘い/甘ったるい	(広)	720			1909	
3. 甘酸っぱい		(広)	1911			
4. 辛い		8c後 (塩辛いの意で) 976 (辛いの意で)				(方言)
5. 甘美な		1120頃				()
6. 渋い		830			1905	1186
7. 塩っぱい		1802~09				
8. 酸っぱい		1823	()			1833
9. 苦い		850頃			1686	
10. まずい		1775			1775	

嗅覚<形容詞>

	触覚	味覚	嗅覚	次元	視覚	聴覚
1. うるさい			[1573]		()	1631
2. かぐわしい (香,芳)			712			()
3. こうばしい (香,芳)		()	720		[1123]	

次元<形容詞>

	触覚	味覚	嗅覚	次元	視覚	聴覚
1. 浅い		(方言)	[1001~14]	7c後	947~957	
2. 厚い	1179			970~999		
3. 薄い	1001	1086		8c後	905	
4. 大きい		()		室町末~近世初		1770
5. 細かい				1792	1889	
6. 細やかな		()		984	1001~14	
7. 高い				720		8c後
8. 平らな				720		()
9. 小さい				10c前		1220
10. 近い				8c後		1872
11. で(っ)かい				1650		()
12. 幅広い				1898		1928
13. 低い				1563		1867
14. 深い	1004~14	()	1001~14	8c後	8c後	()
15. 太い				970		1889
16. 細い				8c後		720

視覚＜形容詞＞

	触覚	味覚	嗅覚	次元	視覚	聴覚
1. 明るい					1689	()
2. 荒い					720	1001
3. 淡い	1884	_____	()		_____	1113
4. 美しい					715	1922
5. うるわしい (美,麗)					712	()
6. 黄色い					970~999頃	1871
7. きれいな					1563	1809
8. 暗い					830頃	()
9. 濃い	1221	830			720	
10. 爽やかな	()	()	()		720	()
11. しずかな (静,閑)					720	743
12. 透明な					1774	()
13. 丸い		()			1439	
14. まろやかな (円,丸)		_____			1930	()

聴覚＜形容詞＞

	触覚	味覚	嗅覚	次元	視覚	聴覚
1. 騒々しい					()	室町末
2. 喧しい					()	1678

付録 II

Williams により作成された、英語の共感覚形容詞 65 語の履歴（通時的変化）を示す表。

[] は、その表現が既に廃れてしまっていることを示す。

() は、どの辞書にもその表現の記載がないが、明らかに現代用いられているもの。

W3 は、Webster 3rd に記載のあるもの。

* は、上昇転移という“方向性”に違反するものを示す。

イタリック体の数字は、MED (Middle English Dictionary) からの出典を示す。

OED は、Old English Dictionary からの情報を示す。

	TOUCH	TASTE	SMELL	DIMENSION	COLOR	SOUND
TOUCH						
aspre	[1350]	[1450]	W3			[1626]
bitter	[OE]	1000				
bland	1667	1836				
cloying	[1530]	1807				
coarse	1582	[1587]				1879
cold	950	[1585]			1706	W3
cool	1000	1800			undated in OED	1947
crisp	900			[1398*]	[1565]	
dry	1000	1700				1961
dull	1230				1430	1475
grave	[1570]				[1611]	1585
hard	Beowulf	1581				1620
harsh	1300	1425	W3*		1894	1530
heavy	1000					1398
hot	1000	1390	[1200*]		1896	1876
keen	1225	1398	syn.pungent in MED		[1602]	1400
light	1000				1398	1887
mild	14..	1450-50			1645	1420
piquant	[1549]	1645				
poignant	[1386]	[1386]				
pungent	[1601]	[1675*]	1668*			
rough	1000	[1545*]				1400
sharp	825	1000	W3*	1537*		1390
smart	1023	[1648*]		[1668*]		[13..]
smooth	1050	1743				1836
soft	1205	[1398*]	[1400*]		1845	1250
warm	888				1764	()

	TOUCH	TASTE	SMELL	DIMENSION	COLOR	SOUND
TASTE						
acid		[1712]	W3			
austere		[1541]			[1680*]	
brisk		1597			[1727*]	[1660]
dulcet		[1430]				1450
eager	[1544*]	[1350]				
mellow	[1797*]	1440	[1644*]		[1563*]	1668
sour		1000	1340			W3
sweet		888	900			900
tart (savory)	[1500*]	1386 1382	[1560]			

	TOUCH	TASTE	SMELL	DIMENSION	COLOR	SOUND
DIMENSION						
acute		[1620*]		1570		1609
big				1386		1581
deep				854	1398	1387
empty				971		()
even				893	1821	1398
fat		[1609*]		893		1398
flat		1607*		1400	1821	1591?
full				1000	[1657]	W3
high		[1430*]		825		1390
hollow				1250		1500
level				1431		1802
little				1000		()
low				1150		1385
shallow				14..		[1626]
small		[1000*]	[1676*]	725		1250
thick				888		1398
thin		1377*		900	1655	1660+

	TOUCH	TASTE	SMELL	DIMENSION	COLOR	SOUND
COLOR						
bright						1000
brilliant					1681	()
clear					1297	1300
dark					Beowulf	1899
dim					1000	1330
faint			1818*		1450	1660
light					825	1450
vivid					1665	W3

	TOUCH	TASTE	SMELL	DIMENSION	COLOR	SOUND
SOUND						
loud		[1641*]			1849	971
quiet					()	1400
shrill		[1567*]	[1864*]		w3	1386
stringent					1907	1656